

## 東海地域西部方言のアクセントにおける

### 「おそあがり」の音声実現の特徴

吉田 健二 (愛知淑徳大学文学部)  
kenjiyo.work@gmail.com

#### 1. 問題点

本稿の目的は、名古屋方言アクセントの音声実現上の特徴といわれる、語頭のピッチ上昇のおくれ（以下、「おそあがり」）の音声実現上の特徴を、関東の東京式アクセントとの対比によりあきらかにすることである。東海地域と関東地域、各 5 名の話者の発話データの定量的分析にもとづき、ピッチ動態のどこに関東とことなる特徴が顕著にあらわれるかを検討する。

名古屋を中心とした東海地域には、内輪式アクセント（上野 1987 : 44）が分布し、関東などの中輪式とアクセント体系・音声実現の両面で共通する点がおおい。いっぽう、東海地方に特有の音声実現上の特徴として、(1)にしめすような、おそあがりの傾向が指摘されている（水谷修 1960 : 9 より。ピッチの値は拍単位の L=低 / H=高でしめす）。

(1) (東京) (名古屋) (東京) (名古屋) (東京) (名古屋)

桜 LHH LLH 玉ねぎ LHHL LLHL 東山 LHHHH LLHHH

3 拍以上の語で語頭の上昇が東京などに比べて 1 拍分おくれ、2-3 拍めで実現するということである。水谷（1960）は自発発話にみられるおそあがりの例もしめしており、筆者も東海圏でおそあがりと聴かれる発話をしばしば耳にする。この傾向は、関東方言とことなる、東海方言固有の特徴といえるだろうか。また、ちがいがあるとすれば、具体的にはピッチ実現のどのような特徴にそれがあらわれるのだろうか。この問題を検討するための端緒としておこなった音声データの分析結果と、えられた知見を報告する。

#### 2. 方法

##### 2.1. 話者

東海方言の話者は、愛知淑徳大学文学部「国語学演習」で実施した言語調査でお会いした 5 名で（吉田健二・他 2016, 2017）、表 1 のとおり、愛知県最西端の愛西市旧八開村、立田村、弥富市と、木曾川をへだてて隣接する岐阜県海津市のかたがたである。調査は 2015 年 9 月と 2016 年 9 月に実施しており、内輪式アクセントとみられる話者は 30 名いた。この 5 名はそのなかから、聴覚印象からおそあがりの傾向をもつとおもわれる話者を中心に、代表としてえらんだ。他の話者についてもおなじ分析を実行中である。関東方言の話者は、東海の話者とおよそ同年代の話者を中心に、5 名におねがいをした。表 1 の生育地は 6-15 歳のときにいた場所である。一時的に他の地域に居住した方が 4 名いるが、この期間については、全員、表 1 にしめす地域のみで過ごしている。

表 1: 話者情報

略称	生年	性別	生育地	地域
yatomi30	1987	男	愛知県弥富市	東海
hachikai30	1986	女	愛知県愛西市（旧八開村）	東海
tatsuta30	1987	女	愛知県愛西市（旧立田村）	東海
tatsuta40	1971	男	愛知県愛西市（旧立田村）	東海
kaizu40	1971	男	岐阜県海津市（旧平田町）	東海
tokyo20	1996	女	東京都練馬区	関東
tachikawa30	1978	女	東京都立川市	関東
saitama50	1965	女	埼玉県狭山市	関東
kawasaki40	1977	女	神奈川県川崎市	関東
chiba30	1982	女	千葉県千葉市	関東

## 2.2. 音声データ

分析対象の音声データは、(2)のような「名詞+の+名詞+断定辞」という構造の短文の読み上げ発話によるものである。文末の断定辞は、なじみのあるものにおきかえてもらった（東海は「やん・じゃんか・だがや」、関東は「じゃん」）。三重の中央式アクセントにおけるダウンステップパターン検討のためのコーパスで（吉田・他 2016）、先行語（ひとつめの名詞）は、中井（2002）で京都の16人全員が高起無核 / 低起無核 / 低起2核で発音した3拍名詞、後続語（ふたつめの名詞、以下「実験語」）はおなじく全員が高起無核 / 低起無核で発音した3〜5拍名詞である。後続語16語を京都の音調型ごとに(3)に示す。

### (2) 実験文の例

田舎の祭りやん                  田舎の野良猫やん                  お金の悩みごとやん

### (3) 実験語（3拍：2語，4拍：5語，5拍：1語）

**高起無核** 祭り，名前，乗り物，ものまね，日本間，二枚目，難問，悩み事

**低起無核** 煮豆，マンガ，生ハム，人形，野良猫，持ち逃げ，人間，旦那さん

実験語16語を先行語の3種類の音調型条件においたので，実験文はぜんぶで48種類。発話は各文1回。10名とも実験語のほとんどを無核型（平板型）で発音したので，ひとりにつき平板型のデータが40〜46例えられた。

## 2.3. 音声データのアノテーションとデータ処理

ピッチ動態の定量分析のための代表値を抽出するため，各音声データに，(4)に示すアノテーションをほどこした（以下，音声の基本周波数を $f_0$ と略称）。図1に2例を示す。

(4) 先行語内の $f_0$ ピーク：P1（図1の1）

実験語初頭の $f_0$ の谷：V1（図1の2）

実験語内の $f_0$ ピーク：P2（図1の3）

ただし、関東の話者および東海の一部（次節参照）に、実験語の初頭にピッチの谷がなく、先行語から連続してピッチが単調に下降するケースがみられた（図1右）。このようなケースでは、V1, P2を確定する基準がえられない。明瞭な谷があるケースとの比較にあたり、とくにP2のタイミングについて、かたよりが最小になる方法として、かりに先行語と後続語の境界時点をV1、後続語の持続時間の中間点をP2とした。

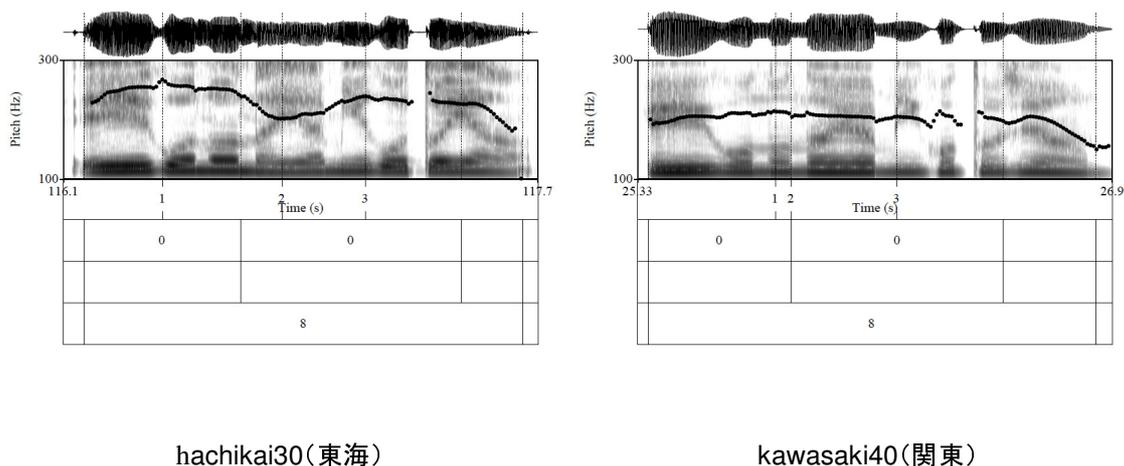


図1: 音声データのアノテーションの例「英語の悩みごとやん」

この方法により確定したP1, V1, P2の3時点について、実現時間とfo値を抽出した。foレンジがおおきくことなる話者間の比較も可能にするため、fo値は各話者の平均値を基準とした標準得点(z-score)に変換した。

### 3. 結果

#### 3.1. V1からP2にかけてのfo値のうごき

以下では、検討の対象を先行語・実験語ともに平板型のケースにしぼる。先行語も平板型で発音されたケースがおおかったので、各話者最低29例(29-35例)えられている。図2にV1×P2の全ケースのfo値を話者グループ別にしめす。右の関東の5名は、個人によるバラツキが比較的ちいさい。総じて、V1=P2の補助線にそって、その左上にデータがならぶ。先行語と実験語のあいだのピッチの谷(V1)から、実験語のピーク(P2)にかけてちいさな上昇があるケースが大半をしめる、ということである。V1=P2の補助線付近および右下に位置するケースは、2.3節でのべた、先行語から実験語にかけてピッチが単調下降をしめすケースの存在を反映する。

これにたいして、左の東海5名は、話者間・話者内のバラツキがおおいきい。2.3節でのべたとおり、yatomi30, kaizu40に前述の先行語から実験語にかけてピッチが単調下降するケースがおおきく、V1=P2の補助線付近にデータが集中する。このタイプを関東で典型的にみられるピッチ動態パターンとかんがえ、かりに「関東タイプ」とよぶ。関東タイプは、上記2名だけでなく、数はすくないもののhachikai30, tatsuta40にもみられる。いっぽう、東

海の話者には  $V1=P2$  の補助線から左上にややはなれた位置のデータもおおい。先行語と実験語のあいだのピッチの谷 ( $V1$ ) がふかく、そこから実験語のピーク ( $P2$ ) にかけてのピッチ上昇がおおきいことをしめす。このタイプを東海で典型的にみられるピッチ動態として、「東海タイプ」とよぶ。このタイプがおおいのは *tatsuta30* と *tatsuta40* だが、*yatomi30*, *hachikai30* にも数はへるものの、このタイプがみられる。東海の話者には、関東タイプと東海タイプの音声実現タイプが混在している、ということである。

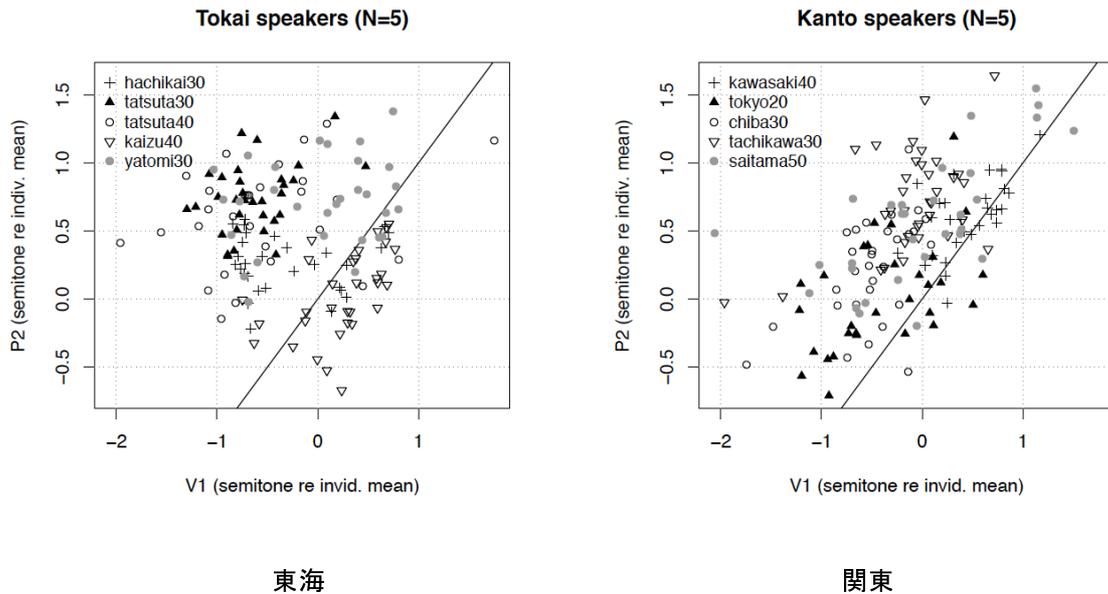


図 2:  $V1$ (横軸) x  $P2$ (縦軸)の  $fo$  値(話者内  $z$ -score). 斜線は  $V1=P2$ .

### 3.2. $P1 \cdot V1 \cdot P2$ の実現タイミング

つぎに、各  $fo$  代表値が実現したタイミングもあわせてピッチ動態全体の傾向を検討する。話速のちがいを捨象して比較できるよう、実験語の持続時間を 1.0、開始時間を 0.0 として、 $P1$ ,  $V1$ ,  $P2$  の実現時間を相対的時間に変換した。この値からもとめた、3 つの代表値のタイミングと  $fo$  値の話者ごとの平均値を図 3 にしめす。東海の話者は、前節で関東タイプがおおいことを確認した *kaizu40* をのぞき、 $P1$  から  $V1$  にかけての下降がおおきく、ふたたび  $P2$  にかけておおきく上昇する。結果として、先行語から実験語にかけてのピッチの谷がふかくなる傾向がある。これが東海タイプのピッチ実現上の特徴とかがえられそうである。これにたいして、関東の話者は、下降も上昇もちいさめで、ピッチの谷があさい。いっぽう、 $P1$ ,  $V1$ ,  $P2$  の実現タイミングには、東海・関東におおきな差はみられないが、やはり *kaizu40* をのぞく東海の話者のばあい、 $P2$  のタイミングがややおそい傾向がある。この点については、次節でさらに検討する。

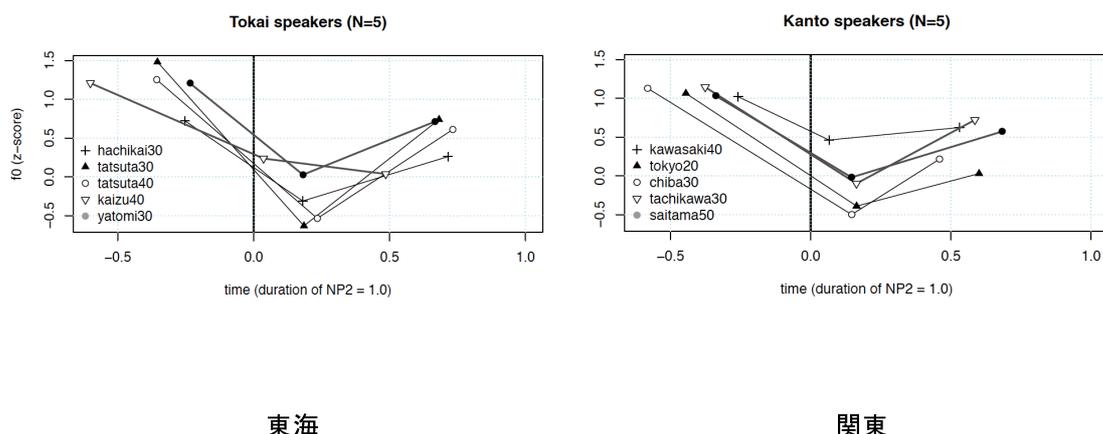


図 3: P1, V1, P2 のタイミングと fo 値の平均値 (実験語の持続時間 = 1.0 / 開始時間 = 0.0)

### 3.3. fo 値とタイミングによる話者のことなりのパターン

前節まででみた関東と東海のちがいは、1 節で提起した「東海方言固有」といえるだろうか。このことを検討するため、3 つの fo 代表値とそのタイミング、計 6 つの測定値を変数とした主成分分析を実行した。第 1 成分 (寄与率 31%) と第 2 成分 (寄与率 27%) の biplot を図 4 にしめす。太字が 10 名の話者、イタリックが 6 つの測定値のふたつの成分の重みによる位置である。まず話者の位置をみる。kaizu40 をのぞく東海の話者は、第 1 成分が正の領域に分布している。いっぽう関東の話者は第 1 成分で 0 付近または負の領域に分布している。両者が明確に分離していないのは、3.1 節でみたように、東海の話者に東海タイプと関東タイプの音声実現が混在することによるとかんがえられる。その傾向つよかった

yatomi30 は、第 1 成分で 0 付近に位置しており、関東の話者とちがいがとらえられている。

つぎに、測定値の位置をみる。上の検討から関東タイプ・東海タイプのちがいをとらえたのは第 1 成分だとかんがえられるが、この重みが正または負におおきい音声特徴は、おおきさの順に (a)P2 の実現時間 (東海がおそい)、(b)V1 の実現時間 (東海がおそい)、(c)V1 の fo 値 (東海がひくい) である。これらは、3.1, 3.2 節で検討した特徴であり、「東海タイプ」固有のピッチ動態上の特徴とかんがえられそうである。

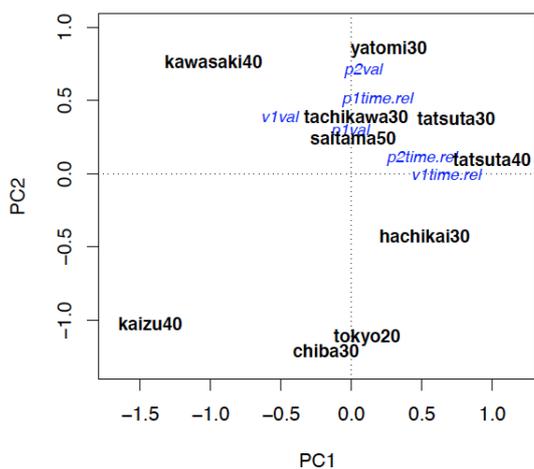


図 4: 6 つの測定値による主成分分析の結果 (第 1 成分 × 第 2 成分)

#### 4. まとめと課題

東海アクセントの「おそあがり」傾向の実態を検討した。結果は東海固有の音声実現上の特徴をうかびあがらせたが、同時に、あきらかに関東側に分類される話者 (kaizu40) や、東海固有の音声特徴とともに、共通語的な音声実現もあわせもつ個人が存在することもしめした。東海地域にも当然、共通語化の波が押し寄せており、この結果はそれを反映しているとおもわれるが、水谷 (1960) の報告から半世紀を経てなお、今回対象とした比較的わかり層に、地域固有の音声実現の特徴もみいだされることが確認できた。

「おそあがり」の音声実現上の特徴のひとつに、連続する平板型のあいだのピッチの谷のふかさがあった。東京方言の語頭のピッチ上昇について、弱化したり実現しなかったりすることもあるが、アクセント単位の特徴としてつねに存在するというみかたがあるが (郡 2004)、東海方言アクセントの音声実現にはその傾向がよりつよいとみることができただろうか。今後の課題としたい。また、これと関連して興味ぶかくおもわれるのが、この地域に、一部の複合名詞の前部・後部要素のあいだにピッチの下降・上昇をおく傾向がみられることである (「英作文」「新横浜」の HHLHLL 型、「反復横跳び」の HLLLLHHH 型など : 吉田・他 2017 : 232-237 で報告)。今回みた、句レベルの接続における谷のふかさが、語レベルの接続 (複合) における、ふたつの要素の韻律上の独立性のつよさと関連する可能性、たとえば、両者ともに東海方言に一般的な韻律上の特徴の反映である、というような可能性はないだろうか。これも今後の検討課題としたい。

**謝辞** 音声データを提供してくださったみなさまに感謝もうしあげます。また、名古屋音声研究会の研究例会上で、重要なコメントをいただきました。この研究は、愛知淑徳大学の「学外教育等活動」予算および、文部科学省科学研究費助成金 (「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」研究代表者 : 窪菌晴夫, 課題番号 26244022) による助成を受けています。

#### 参考文献

- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42:1, 15-70.
- 郡史郎 (2004) 「東京アクセントの特徴再考－語頭の上昇の扱いについて－」『国語学』55:2, 16-31.
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』東京 : 勉誠出版
- 水谷修 (1960) 「名古屋アクセントの一特質 (前半)」『音声学会会報』102, 8-10.
- 吉田健二・他 (2016) 「三重・愛知県境方言における方言の接触と変容」『愛知淑徳大学国語国文』39, 218-250.
- 吉田健二・他 (2017) 「愛知・岐阜・三重県境地域における言語使用と言語意識」『愛知淑徳大学国語国文』40, 207-242.